

韓国側基調講演:「韓日間超国境的地域連携発展戦略及び課題」



国土研究院緑色国土・都市研究本部前任研究委員
崔 榮國 (チェ・ヨングク)

まず第1回日韓における地域間連携推進シンポジウム開催を心からお祝い申し上げ、また個人的にはこのようなすばらしい席において、私が基調講演をできますことを大変光栄に思っております。

またこのシンポジウムの開催にあたり、日本側の小島局長を初めとする関係者の皆様に心から感謝申し上げ、またこのような機会をくださったのは韓国の国土政策局長でもありますので、韓国の方々にも感謝を申し上げたいと思います。

今日、私のテーマというのは、韓日間の超国境的地域連携であります。私がこのような話をするようになったのは、2008年から2010年まで南海岸発展計画の策定に参加していたためであり、この体験をもとにして、今日の講演の内容をつくらせていただきました。

私が今日お話をする焦点というのは、先ほど大西先生が日本の国土の変化とか、そういった話をしてくださったのですが、非常に関係があるのかとか、韓国と北部九州における関係性とその構築、潜在力、そういったことを調べながら幾つかの戦略について申し上げ、それから幾つかの課題についてお話をさせていただきたいと思います。

1. 超国境的地域連携の意味及び必要性

皆様ご存じのように、私たちの地球というのは非常に転換期を迎えているのだと思います。経済や国土のあり方といったものも非常に変わってきているのだと思います。

国境といったものが昔はとても重要にされて

きたのですが、今は教育、文化、物流、交流、そういったものが自由にされるようになりまして、硬性から軟性国土へと転換しつつあるというふうに考えられています。

今の地域の段階というのは国土といったものにあるのではなくて、ビジネス単位にあるということが考えられ、各リーダーは生産性の向上のために、今は外部の技術、資本、人材等の導入に一所懸命努力しているのだと考えられています。

またそういったことのためにも、周辺地域とのネットワークが非常に大事になってきていると思います。そういった意味ではセールの時代が来たと思っております。

実は韓日の地方の交流というのは昔からの歴史があると思います。韓国と九州の間においては地方との交流というものも非常にありますが、両国においてはそういった交流というのは非常にたくさんあると思いますが、民間企業においてはそのような活発な関係ではないと思っています。

その理由として、1つは韓国においても、日本においてもやはり中国という国へ非常に関心が集められてきている。もう1つは韓国の企業と日本の企業が活発に交流できないのは、それぞれの企業間における関心事が違う。韓国は技術移転に興味があり、日本は消費、販売において非常に関心をもっていると考えています。

そういった違いがあり、民間企業においては非常に活発な交流はまだ行われていないのではないかと思われていますが、韓国と日本における経済、国土観点においてはさまざまな共通の状況をもっていると思います。

1つは産業分野において、中国から非常に追撃を受けているということです。造船や車などにおいてもそうですが、半導体や環境産業以外はそのような状態にあると思います。そういったことを考えてみると、これからこういったものから脱皮していかなければいけないのではないか、もっと発展させなければいけないのではないかと思われ

る課題です。

2 つ目は東アジア全体から見ても、やはり車や鉄鋼など同じ分野の産業を持っていると思います。そういったことにおいても非常に過剰設備の現状にあると考えられますので、それも変えなければいけない。

3 つ目としては、人材確保になりますが、韓国の南海岸は首都圏に比べ、また、日本の九州においても東京よりまだ条件が弱いわけですが、そういった意味では研究分野やマーケティングなど、そういったものに関して見てみますと、やはり中央が中心になっている、そういったことにおいても韓日が似ているところだと思います。

それから、国土政策においても両国は幾つか似たところがありますが、先ほど大西先生がおっしゃって下さったように、韓国の第4次国土総合計画再修正計画、日本の第5次全国総合開発計画から見ても、超国境的協力をもとにして、ネットワーク構築を強調しているところです。

日本と韓国は自由貿易協定について非常にセンシティブに論議されていることがよく知られています。また、韓国においても大企業よりは中小企業の比重が大きい南海岸においては、競争力に関しては中央よりは非常に難しい状況でもあります。そういった意味では新しい挑戦が必要ではないかと考えられています。

2. 海外事例の検討及び示唆点

今簡単に南海岸と日本の北部九州の状況についてお話を申し上げました。ほかの国においては、地域研究をどのようにしているのだろうかということを調べてみますと、2 つの事例がありました。時間の関係上1つだけお話をしたいと思います。

ユーレジオに関する事例ですが、これはオランダとドイツの連携であります。オランダとドイツの関係というのは私たちの国と似たような関係がありますが、今回は省略させていただきます。

もう1つのエレスンド地域について御紹介したいと思います。これはデンマークとスウェーデン間における関係ですが、先ほどのユーレジオが地

方と政府との関係協力としましたら、エレスンドというのは都市と都市、2 つの都市の関係であるということが考えられます。

私たち日本と韓国にとってよい示唆点を持っていると思います。これは都市間の連携ですが、政府間でその都市を支援しているという事例だと考えられています。

1991年に政府間において協定が締結され、1993年にエレスンド協議体が構成、越境的政策が推進されてきたのですが、2000年に12キロに渡るエレスンド大橋が設置されたことから本格的な協力の場がひらかれたということでもあります。

これは経済成長だけではなく、雇用問題や社会的な統合、周辺のさまざまな生態的の保全など様々な協力目的を持っているということから考えてみても、韓日においても示唆点が多いと思っております。

それ以外にもオランダの Blue-Banana のネットワークや、フランスの地中海沿岸の観光・物流・R & D 拠点軸などがありますが、周辺との連携のために自国のさまざまな研究や観光資源等を競争させながらネットワークを強化したということだと思います。私たち韓国の南海岸と非常によく似た条件を持っていると考えられます。

3. 韓日間地域連携推進戦略

次は韓日間における国境協力の推進戦略であります。段階や課題などのプロセスをとってお話をしたいと思います。

まず、連携をどこから始めるかということが最も大事だと思います。先ほどお話したように、今日のテーマというのは日韓間の国土に関するものでもあります。産業の構造や経済的なもの、歴史的な観点から見て南海岸と九州北部の連携が大事ではないかと思います。

その中でも、韓国では釜山（プサン）、蔚山（ウルサン）、慶尚南道で釜蔚慶（プウルキョン）地域といわれます。蔚山（ウルサン）は南海岸には含まれませんが、一応釜蔚慶地域というふうにいわれており、その地域が非常に注目を浴びています。

日本では 福岡、長崎、佐賀、山口、この4つ

をフナサヤ地域間といいまして、この地域間における連携が非常に重要ではないかと考えているところであります。

韓日の地域連携における構築の条件についてお話をしたいと思います。市場とか経済とか似たような条件を持っている釜蔚慶地域とフナサヤ地域は約 200 キロ離れているのですが、地理的なネットワーク構築は、今は容易であるというふうに考えられています。

それから、2005 年に住民を対象にして調査をしたことがあります。半数以上が地域連携に共感をしているということです。6 年経過した今になってみるとその割合はもっと高くなるのではないかと思いますし、多分日本におきましても、住民の変化があったのではないかと思います。

協力分野はいろいろありますが、この釜蔚慶地域は自動車、経済において強みがあり、九州北部も同じです。最も弱いのが環境分野です。産業分野においてはグリーン成長の時代を迎えています。そういった中で成長している環境分野での協力が考えられます。

また韓日間の文化交流、映画、ドラマ、音楽を通しまして、さまざまな付加価値が形成されておりますので、そのような分野において新しいビジネス環境の提供が可能であると思います。

あともう 1 つは、南海岸圏と北部九州を見ますと、非常に小規模であるが強いアイテムを持っている、そういった中小企業が多いと思います。ですから、情報分野、ソフトウェアにおける新しい市場をこの 2 つがタッグを組んで開拓するのであれば、新しい市場を開拓する上でそのコストを低減することができますと思いますし、また双方が新しい市場に進出する上で、双方においてテストベッドして使うことができますと思います。

協力分野は自動車、機械、情報通信、医療サービスというような分野がありますが、このような分野においては、高い付加価値を生み出すことができる素晴らしいアイテムがたくさんあります。

ですから、きちんとネットワークを形成するのであれば、グローバル化の時代の中で非常に適した分野だと思います。また今の時代はスマートト

レード時代というふうに使われています。過去の産業時代のように生産によって利益を得るのではなく、ソフトウェアにおいて利益を得る、そういったスマートトレードの時代と呼ばれています。スマートトレードというのが最も望ましい提携の関係ではないかと思われます。

2 つに分けて考えてみたいと思います。1 つは消極的な連携です。今現在両方を比べて優位をもっているほうに協力水準を合わせるということですが。協力がいいよりはしたほうがいいという、そういったレベルの連携です。ですから、それはまだ地域の補完性についての認識はありません。

次は積極的な段階ですが、これは民間の活発な交流を行うわけですが、これをするためには民間における相互補完性の認識というものが必要となってきます。自分たちの強みと弱み、相手の強みと弱みをうまく連携することによって成功しようというような認識がなければ、積極的な連携はできません。

今現在は消極的な連携の段階にあるのであれば、こういったシンポジウム、あるいは企業のさまざまなネットワークをとおして、積極的な方向へ進むべきだと思います。

日本、韓国の国土政策、また地方政府、そして地域住民の判断によって行われるものだと思います。

私は 3 つ戦略として提示します。1 つは目標です。この目標を見ますと、双方の地域のどちらに強みがあるかということを見るわけです。共通の目標をつくるということが目標です。

まず、韓国の場合、南海岸には安全な国土防災、温かな気候、先端物流システム、観光、医療・健康サービスに強みがあります。

北部九州は情報、機械分野、環境、バイオ、こういった分野において強みがあります。これらをうまく連携することによって両地域の相互補完性の目標を設定するという必要があるということです。

2 つ目としましては、幾ら地域の連携を強化しても、企業においては競争を意識せざるを得ません。ですから、簡単な問題ではありませんが、重

要なのは企業間の協力をするためには、企業間が協力するための条件づくりが必要です。中央は中央政府間、地方は地方政府間、企業間は企業間、民間は民間間の協力ができる、そういった協議体を構成するというのが2つ目の戦略です。

3つ目は、韓日海峡圏知事会議が徐々に拡大し、地方政府が協議体を構成するといった3段階に分けての戦略というものを私は提示したいと思います。

4つ目は、このような戦略において、課題を幾つか設定します。私は南海岸圏発展計画の策定に参加しましたが、韓国、南海岸ではなぜこのような計画を策定したのかということについてお話をしたいと思います。

4. 超広域開発圏としての南海岸圏発展案(南海岸ベルト総合計画)

韓国の関係法を見ますと大きく分けて2つです。グローバル時代に対応し、国際競争力を高めるということが1つ。もう1つは、日本も同じだと思いますが、首都圏に集中しているすべてのもの、首都圏に匹敵するような地方をつくる、そういったものが大きな目的です。

これはフランスと同じような事例です。南海岸圏の様々なすばらしい強み、例えば釜山(プサン)などの関門としての特性、また観光、R & D、そういったものを育成することにより総体的に強みを高め、そして北部九州の強みと連携させる。それを目的としまして、私どもは南海岸の発展計画を策定いたしました。

韓国の超広域開発圏は4つに分けることができます。この4つの地域における推進方法は5つありますが、1つ目は北東アジアの協力の促進、2つ目はインフラの構築、3つ目は国際協力をととした北東アジアの経済協力の促進、4つ目は地域発展基盤の構築、5つ目は南北交流地帯にすることです。

今現在この超広域開発圏の中で3つの海岸圏は韓国の全体の市、群、区の33%に該当しています。南海岸圏は新しい経済物流の保有ハブのサンベルト、東海岸圏はグリーン成長を先導するエネル

ギー・観光ベルト、そして西海岸圏は経済圏を主導する新しい産業ベルトというものを目指しています。

ここで南海岸圏のベルトをつくる理由なのですが、南海岸圏における産業構造というのは、日本への輸出度が非常に高いです。ですから、機械、化学、自動車などの産業に偏っています。今後私どもが投資環境を改善するためには、新たな脱出口をつくる必要があるのですが、そのためには何か別のアイテムをつくらなければいけないと考えましたので、この南海岸圏サンベルトをつくることにしました。

このような交流がずっと行われていますが、それにもかかわらず地域連携については相互補完性について共有するといった、そういう認識が不足しているのでこれが発展しないのです。

ですから、南海岸が強みを提示し、北部九州のほうも強みを提示し、お互いに補完することによって、成長していこう、そのようなビジョンを提示するのであればお互いに連携することができると思いましたので、私ども南海岸の発展を促進するためのサンベルトを進めているのです。

皆様の頭の中には朝鮮半島があり、東のほうに日本があり、西側には中国があります。それを逆さまにしますと、南海岸の上には環太平洋が見えます。そして、東ではなく西側には日本があり、東には中国がありますので、南海岸圏が東西を結ぶ役割を果たします。

日本の場合、南海岸圏とうまく結ばれるのであれば、南海岸圏をとおして中国と交易が可能になりますし、東のほうに上がっていくのであれば、シベリアと結びつくことができます。そのような強みがあります。ですからそのようなネットワークを構築するのは非常にメリットがあると言えます。

ここからは私が参加しました南海岸圏の発展の方向性についてお話をしたいと思います。この計画につきましては、今日のパネリストの趙(チョ)さん、鄭(チョン)さんと一緒につくりました。私が代表して、南海岸についてお話をしたいと思います。目的についてはパネルディスカッション

ンのときにお話をしたいと思います。

まずは足場をつくらうということ、そして新しい成長軸をつくって首都圏に対応する経済圏をつくらう、そのために周辺地域と連携するための枠組みをつくらう、そして東西の海岸圏の1日生活圏を構築しようというのが目標です。

2 つ目は、周辺都市との協力的ネットワークをつくるための基盤構築をし、南海岸圏のさまざまな分野の発展を促進しようとしています。

3 つ目は韓国では、南北の方向への交通網というのは発達していますが、東西間の交通網は発達しておりません。

例えば、今日この会議に参加していらっしゃる釜山（プサン）にいらっしゃる方は、金海（キメ）という地域をとおしてこちらに参りましたが、全羅南道にいらっしゃる方は西から東に移動して、釜山（プサン）から日本に来るよりも、逆に北上して、仁川（インチョン）から日本に来るほうが早い、楽だと言います。

ですから、昨日も1日かけて西海岸からソウルを北上して日本に来ました。そのように東西の交通の便が非常に悪いです。東西の経済圏の統合というものがが必要です。東西間の時間帯を短縮しようというものです。

このような3つの目標のもと、グローバル経済・物流拠点の育成、世界的な保養観光地帯の造成、統合インフラ及び国境を超えたネットワークの構築、そして東西の統合及び地域発展拠点の育成、以上4つの戦略を推進します。

第一の分野におきましては、戦略的な新産業をつくり釜山（プサン）と光陽（クァンヤン）といった南海岸におきまして、新しい新時代の産業を創出し、北東アジアにおける、物流港湾の関門を構築するのです。

全羅南道の場合には、島が多い海ということで非常に美しい島がたくさんありますのでそういった島を活用し、また南海岸には非常に歴史がありますので、そういったものを利用して歴史的な観光地域をつくらうということです。

西海岸、南海岸はリアス式海岸ですので、非常に小さな港がたくさんあります。それを利用して

ヨットのマリーナづくりを計画しているのですが、特に今年、国土海洋部ではヨットマリーナ関連で重点的に政策を推進します。

今日の午後のセッションでは西海岸に属している華城（ファソン）市というところで海洋団地の紹介をしてくださるそうです。

3 つ目としては、統合インフラになりますが、ネットワーク構築です。これは隣接する地域との連携、ネットワーク構築というものが3つ目の戦略としてあります。

4 つ目としては、韓国の東西統合及び地域発展です。韓国の全羅南道と慶尚南道の隣接地域にソンジン川という非常に美しい川がありますが、その地域に東西統合地域をつくります。シルバー産業を育成するには非常によい地域だと考えられているのですが、日本の方々もそこに非常に興味を持っているところではないかと思います。

局長にも先ほど御紹介していただきましたが、5月から8月まで麗水（ヨス）において世界博覧会があります。そういったところにもぜひ皆様の御参加を期待しております。

このような事業において概略的にお話をしましたが、あとでパネルディスカッションの時間にまたお話をしたいと思います。

すべての予算としては24兆ウォンが投入される計画であります。国費の25%だそうです。

自然環境保護やさまざまな事業がありますが、その中で1つだけ統合ブランドを御紹介したいと思います。その名前はTHE DREAMING SEAであります。南海岸の統合性を対外的に伝えるブランドとして提案しています。

そういった事業としては昨年末から全羅南道の珍島（チンド）において進めています。慶尚南道と釜山（プサン）においてもそういった事業が進められると思いますが、みんなそれぞれに特色があります。

それをTHE DREAMING SEAというタイトルでもって推進しているところであります。

こういったもので南海岸の発展に進められるのであれば、それは非常にシナジー効果があります。産業間の構築があると思いますが、成長、挑

戦が期待されます。

もう1つは全羅南道と釜山（プサン）がお互いに事業を進めながら経済的に協力していくようなものの基盤をつくることが考えられます。こうした統合事業というのは、それだけではなく、その周辺地域との連携を促していく基盤になると考えられます。

もう1つは首都圏に発展が集中していたのですが、それを南海岸地域において、韓国の国土全体における発展、そういったものの基盤となるのではないかと期待されております。

南海岸はそういった閉鎖的な地域から抜け出して、開放的に東アジアと連携できるような、未来を展望していくことを考えていくことができるようなものとして提唱できるのではないかと思います。

私たちが求めているものは、これからはオープン的な思考をしていきたいということですが、そのためにはやはりシステムを転換していかなければいけません。そのためには南海岸が福岡などの地域とネットワークを構築していくような役割を果たすのではないかと思います。

このような韓日の構築の必要性、南海岸の構築の必要性について話をしてきましたが、それをもとにして、これから韓日の発展のための基盤を考えていきたいと思います。

5. 韓日間超国境的地域連携のための協力課題

1つは共感、つまり認識を拡大させていくことだと思います。それは相互補完的な関係形成をしていく必要があります、そのためには政府からのサポートが必要だと考えられます。

2つ目としては情報交換です。昔は情報というのは独占して競争力が発揮されてきましたが、これからはネットワークを統合し、そういったシステムにおいて、情報を出すということから新しい情報を創出可能である、と考えます。

3つ目は、相互補完的なよりよい産業を促すようなことが必要だと考えています。

韓日間地域連携のための協力課題として3つありますが、1つは政府間だけではなく、自治体、

民間部門においてもその役割を拡大していく必要があるのではないかと思います。

3つ目は、強調して言いますが、企業間の技術競争力をお互いに分け合うという、そのような積極性を見せてくれたらいいのではないかと思います。相互補完的な関係であることが非常に大事であると考えられます。また九州と韓国においてもお互いに相互補完的な分野を提示する積極性があればいいと思います。

3つ目はそのためには制度的なシステムが必要だと思いますが、ベンチャー資金や、インキュベーターシステムを共同で運営することや、それを中央、自治体へと推進していく必要があると思います。民間は民間で、研究所は研究所として、それぞれが協力しながら基盤をつくっていく。そのためには協約といったものをつくることもいいのではないかと思います。

このような3つの課題を説明させていただきましたが、現実的な話しではないのではないかと思います。異論もあると思いますので、もう少し具体的な事例を考えたいと思います。

韓国は釜山（プサン）と福岡において、越境的広域経済圏の形成のための事業展開が推進されればよいと考えますが、そのためにお互いの空間を相互に検討しながら、土地利用計画などを連携してみたり、そのためにどういった産業や計画に協力できるかということを見つけ出したりすることもできると思います。

できるだけ早く2つの地域間、どの地域でもいいのですが、成功モデルを早くつくることがとても大事だと思います。

そういったことから、さまざまな交換計画を共同して作成するのによい方策だと考えられます。そうすることでお互いの関心事が同じネットワークをつくっていくことができるのではないかと思います。

最後に、日本の非常に有名な企業家である大前研一氏の本を何年か前に読んだのですが、『地域国家論（95年3月 講談社）』という本がありましたが、その中にグローバル経済時代においては地域国家論といったものを彼は主張しているの

すが、500 万から 2000 万規模のグローバルインフラをもつ地域が非常に大事だということを主張しています。

今回のシンポジウムは、地域国家論を提示できるようなそういった機会になったと思います。

もちろんすばらしいアイデアというものも大事ですが、実行しなければすばらしいアイデアの価値はないわけです。最近私は、スティーブ・ジョブズの自伝を読みました。その中にアップルとソニーについての話がありましたが、アップルが非常に急成長をし、皆様もご存じように、ipad や ipod、iphone の時代になり、最近は多くの人が持っていますが、昔はソニーのほうがアップルよりも非常に優れた技術力を持っていたわけです。

このようなソフトとハードのコンテンツそれぞれを統合するという考え自体はありましたが、ソニーはどのようにすればいいのかという具体的な考えがありませんでした。しかしアップルはそれをやり遂げました。

そういったことから、アイデアを実行したということが非常に優れたことだと思います。そこにはスティーブ・ジョブズの決断力、予知力、そういったものがあつたのだと思いますが、アイデアを実行する意思の強さ、ソフトウェアとハードウェアを統合する意思が強かつたのだと思います。

ここにいる皆さんがそういった予知力を持っていらっしゃると思いますが、こういった今日のシンポジウムについて、これから何年後かにこういった会議があつたということを思い出すときに、これからの連携において非常に意味のあるものだったということ、それから成功的な連携の基盤をつくつたということになれば嬉しいです。

これで私の発表を終わります。

ありがとうございました。